法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

邯鄲

八重垣

14

シテ次第
うき世の旅にまよひきて　夢路をいつとさためん
是はしよくの国のかたはらにろせいと申者也　我人間にうまれながら仏道
をも願はず　たゞばうぜんとあかしくらす
り也　聞楚国のやうひさんに尊き
知識のましますよし承り候ほどに身の

一事をも思ひ立ちては今までは
さん候 上ゲ いつぞや仙
の法を行ふ人のしばしこれに御泊り候ひて
これなる枕を置かれて候
されてかんたんのしるしかんたんの枕と
申すなり くはしく 詞 さてはきこえたる

せなしかんたんの枕とやらんをしばし見せ
給へ 身の上を見れば人間に生まれて仏法
かたき事なれども 上ゲ 一睡の夢を見るまで
ひとしく世の中の事を思ふ心の気
とかくてかんたんの枕にまかせ給へ
かりく 上ゲ
いふべき事の

きてつゐさる君そ　松田の門の内に
住あら世はよゆはり中の人とそ勅使を
まてきつるらて　おもふことすや王位に
はなもなほ世へふるあつらへき　せいひし
つてくりへきさげ留毎をうつし中へき
されずいゆくそて御ますめでたやして

ふかきるへし　さはさていらくゆく露の
ひかりか中玉のそ　ひかりもあらふ苗
の中ゐ　かかへきことはわてますく
さみてめぐるいちて　玉のみそぎり
ゆかのみなく悲しいをはれ露て一河の流
といふそをれらへとえるそうきこそろ

同サシ

おりからなれやきさらきの　くれもなかはのわかき
そなれ二月のひかりはあをきけきこんつき
かすみあまりてんひかりもみちくてけふて
うへふるあめのおなのかほはさんくのい
さこゑもしきく宮なれかてあめ玉なるとい
つる人まてひかりをかわらさそかわる

ここに又ふかきしきみのよなれこそとききん
しふるのあたりてかすてとそふにちなれ
かきさら那せん人をゆんはなれみなもれ
かすもほそひてのけいせんにまんきれ
こそなれしふるふかきこ琅ふひく白のなの
こそてかならしく　いつしふ三千余

あらたなるもとていてこそ日輪を
いにしへよりて要ふ帝宗太子に書
の山をのぞみてはむらの月輪を晴れ
らてむへてこれは長生殿のうちには春
秋をとめりて不老門の前には日月
おそしといふ心を思へされて[illegible]

そうりんやうきのしゆにて位に付給ひ
ていふとも年ふらば仙薬をきこして
のさは八百歳一千歳までも寿をたもち
けふのきみてんのちんはまかけへゆのこ
まして我て気あり[illegible]
ハこれ仙家の酒の名也　かくいふの[illegible]

事はおほく紀家のひつきに見えたり 寿命は
千代をことこえなんとし 菊花の寿も
ひさしかるへし 見てゆくに 民の人
国土安全長久の栄花をきはむ
みなもとはいはさらす酒なれは菊の盃
そらくふつやれきふよめくれなり

つきせぬくすりはいとゝすいのつゆふかきわれ
てそくすれてそてちいさき筆に
みてれなるかゆをひらくしてのを
もえてもひらきれてさつきれけの
めくりきてそひとしき 秋てれし菊
の花かふにふみてまもつよりて関也

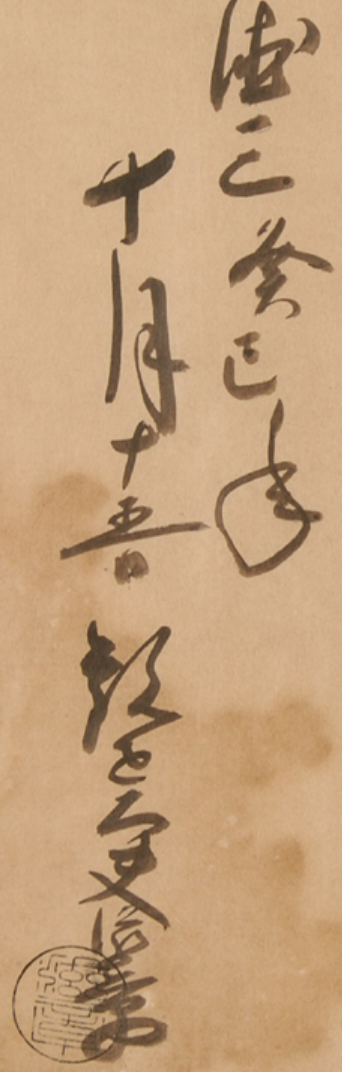
みなみんなもつきしくえすられぬとの
みなれくあそてくそまふの菊
とふどのめてかんろてかてうんともろ
ともれてりふ昭いくてうあの御代な
ひさとあさき曲ちみの栄花のさしふ
みてけふきれらへてりかへき 楽 いつまでを

栄花の春もすぎて 長代て
ひさしきの御代月 ひさわて栄
あれど雲ぞ袖をかざしのでさきぬ
舞とうふ重てもきそく日いよいよて
おもうけくたりてうかかて替へて
到りふたり いつかかて替へて 月み

さなり　春の花さけは　紅葉も
色こく　夏かと思へは　雪もふりて
四季おり〳〵は目の前にて　春夏秋冬
万木千草も一日に花さけり
おもしろや不思議やな　かくて時すき比されは
五十年の栄花もつきてまこと

は夢の中なれは　みなきえ〳〵とうせて
ありつるかんたんの枕のうへにねふり
の夢はさめにけり　盧生は夢さめて
くせいらの春秋の栄花をたのしま
ちふれてとゝせんとおもひあかりての
かりおもへは只一すいの夢也

ち、松の風の音こそ有り　あさましや
かくいはんとてもかゝりけれ　覚悟
の御ことに　御子孫　さて最期の時
乗るやの一言は心にありし　我
きこえてしまふかしや　[illegible]
甚れのうき世をいとひける　百余人

の人々もいかにそれて若[illegible]を立
十余人の御前に迄れ各々ふかきそれ
まてありし御最期のなみだよりなれ
あはれて男子余人を紙たに子恵み
くされまでありけふこそ事も一度
の最期　[illegible]ぞこなたを悲しみそゞく

世人とかの歌をとりしらず知識いとまなく
たちばかりのかぐらがんこしのはかりの
かぐらんこしの男女世をそこなうえ
てのきみるあへてゆるさず